

〈研究余瀟〉

『出版月評』と浜田健次郎

杉 原 四 郎

I

浜田健次郎（1860—1918）は、明治17年に帝国大学文学部の政治学理財学科を卒業した。同期生に阪谷芳郎・平沼淑郎・添田寿一・加藤彰康らがいるが、浜田は彼等のように官界・財界・学界・教育界のいずれにも目立った足跡をのこしていない。私が浜田の名を知ったのは、明治時代の経済雑誌の歴史を追ってゆく過程においてであった。彼は明治23年1月創刊の月刊雑誌『東京商業雑誌』や同24年創刊の『商業』（月刊）に関係し、そこに多くの文章を寄稿しているが、当時彼は夜間中学である東京商業学校の教師としてそこで教壇に立つとともに、その学校を処点として発行された上記の諸雑誌に関わっていた。ところが明治26年彼は、「先輩数氏の勧誘に従い、家事上の都合と、親しく実業界に接触して多少その進運に貢献したい考から、大阪商業会議所の書記長として大阪に帰住することになり」、経済雑誌との関わりも舞台を東京から大阪にうつることになる。まず『大阪商業会議所月報』の第11号（明治26年7月）に寄稿した浜田は、やがてその月報の編集者となってその充実につとめ、『貿易通報』と改題された（明治39年4月）後も引き続きその編集に当たっている。そのかわり浜田は当時大阪で発行されていた種々の経済雑誌（『商業資料』や『大阪経済雑誌』など）に寄稿するばかりではなく、明治30年5月に創刊された旬刊雑誌『日本経済雑誌』に伴直之助と共に主幹となった。さらに大阪商業会議所を辞任後の明治43年4月に、旬刊雑誌『経済』を発行兼編集者として創刊したのである。

このような浜田と経済雑誌との関わりについては、杉原『西欧経済学と近代日本』（未来社、1972年）や『日本経済思想史論集』（同、

1980年)でとりあげ、東京商業学校との関連については杉原「浜田健次郎と東京商業学校」(『甲南経済学論集』22—3、1981年12月)で論じておいた。本稿は、浜田が帝大卒業後勤めた官報局に在職中(明治17—22年)に関係した『出版月評』をとりあげ、浜田が最初に経済論文の寄稿をその雑誌にはじめた当時の状況を紹介しておきたい。

『出版月評』は、官報局雑誌部長浜田の上司の高橋健三(官報局次長、後に局長)が中心となって明治20年7月に創刊(持主兼編輯人横井鋏太郎、月評社)したもので、四六倍版、毎号60—70頁、明治24年6月に出た第40号で廃刊となった。全巻朝倉治彦監修で龍溪書会から復刻版(全6巻)が1983年に刊行されている。

『出版月評』第1号の巻頭にある「出版月報ノ発兌(無署名)はおそらく高橋健三の筆になるものであろうが、「著書出版ノ批評ヲ専門ト為ス所ノ定期刊行物…ノ嚆矢」たる本誌を刊行する意図をのべている。印刷費が低廉で資本がすくなくとも出版が可能なので最近では新刊書が平均一日に十数点にのぼるが、読者の範囲が広がったという点では進歩だが、書籍の品質はむしろ低下したおそれなしとしない。古書翻刻や洋書の翻訳も射利の目的で企画されたり半訳半著が大半で杜撰粗雑、世俗の嗜好に迎合したり大家の題辭序文をかりて公衆を欺くなど、悪書が横行している現状をただすためには厳正な批評が必要である。本誌はその為に出される。この趣意に基づき著書の種類により各専門家に評論を依頼する為の社友の氏各を掲げているが、その中には高橋健三や浜田健次郎、坂谷芳郎の他、各方面の識者がならんでいる。わが国には信頼される書評誌(紙)が今に至るまで育たずに来たことが外国と比べてわが国の文化水準の低さを示すものとされるだけに、本誌が40号で挫折したにせよ、最初にこの道に一鋏を入れたことは注目に値する。浜田にとっても本誌に参加したことが彼の長く経済雑誌にかかわりつづける端緒となった、つまり彼にとってはジャーナリストとしての原点がこの『出版月評』であったという意味で、重要な意義があるといえる。経済学者として彼がどのようにこの雑誌に登場しているのかをみてゆくことにしよう。

Ⅱ

本誌はまず巻頭に「批評」という欄があり、新刊書数点がとりあげ

られてその書評がならんでいるが、浜田はその欄につきの5点を取りあげて書評している。榊原浩造『欧米鉄道経済論』博文堂、本誌第1号、以下1と略する)土子金四郎『経済学大意』、『財論』(哲学書院、(10、18)杉山重蔵訳『惹隠原著経済学』(文盛堂、23)、永田健助編著『萬国商業地誌』(丸善書院、30)。このうち土子の著書の書評に対しては土子からの反論とこれに対する浜田の答弁とが掲載されており、ジェウオンズの *Primar of Political Economy* の訳書については原文をかかげて訳文の吟味をくわしく行っているのも後になわし、まず最初の二つの書評を紹介することにしよう。

本誌第28号の雑誌批評に創刊された『東京商業雑誌』をとりあげ「浜田文学士ノ本邦物産誌編集ノ必要ヲ論ズル」ことに注目しているように、浜田は東京商業学校で鉄道論や商業地理を講義していたのだから、彼が榊原や永田の著作に注目したのは当然である。

浜田は米国で同国の鉄道を見た後に日本鉄道会社に入って幹事の要職にある著者の著作として大いに期待したが、その期待は充たされなかったとして「本書ノ性質ニ就キ」つぎの5点を批判している。(1)本書は『欧米鉄道経済論』と題されているが、内意は「全ク一般鉄道業ニ関スル尋常ノ事柄ヲ述ベタ」もので、其の論據は多く場合本邦にとられ、引用する材料はほとんど米国の鉄道で欧州鉄道の事は「眞々寥々タルヲ見ル」ゆえに、題名に欧米の二字を冠するは穩当ではない。(2)本書の章別構成は「或ハ各章孤立シテ思想関連ノ点ニ於テ稍々缺クル所アリ」、各章を論理的に排列して章を逐うて思想を發達させるようにするには章の順序を大巾に改める必要があるとして、浜田は全14章の順序の組み替え案を示している。(3)経済学上の思考として最も重要なのは流動資本と固定資本との関係である。何故なら鉄道は固定資本の一部だから、鉄道業と流動資本との関係を説いて充分な論究をしなければならないが全くその論述なく、一般に鉄道経済と他の産業社会との関連の考察が不十分である。(4)精密に事物の利害得失を査定するには必ず統計に頼らざるを得ないが、特に鉄道経済については統計を精選して活用する必要があるのに、本書は統計を挿入すること実に乏しい。世人が統計を好まぬから避けたというが、統計によらなければ眞実の関係はわからない。(5)わが国のような後進国では欧米諸国の

経験した実績から鉄道の得失利弊を学ぶことができる。しかるに本書は欧米の実績を参照する必要を論じながら、その鉄道制度の発達の歴史的事実を掲げること極めて不十分である。

『万国商業地誌』について浜田はまず、商業経済に最も必要な商業地理の著書がわが国になく、東京商業学校でこの学科を引き受けた自分も著述を企てたが実現しなかったので、本書に接し、756頁の大著で緒言総論、アジア洲、南洋群島、北アメリカ洲、南アメリカ洲、ヨーロッパ洲、アフリカ洲の七部よりなり、各部が農・工・商の景況と各国の商業史を含むという構成であることを知って、著者の労を謝し功を賛する。だが内容を吟味すると意に満たぬ点もあるとして、つぎの2点について批判を加えている。

(1)分編法の不整頓。(イ)緒言総論と二つを重ねている意味が不明で、そこに記されている事項の配列が極めて錯離している。(ロ)アジア洲で朝鮮国を支那帝国に付随して別に編を設けないのは朝鮮が政治上貿易上持つ重要性から不当である。(ハ)英領香港や葡領澳門、さらに印度支那地方の諸邦をすべて支那帝国に挿入附記しているのも諒解に苦しむ。支那の編中に収むべからざるものを収める反面当然支那に附記すべき西藏を遠く印度部緬甸の條下に附記しているのも不当である。(ニ)ロシア帝国はアジア洲の部にアジア魯領をおきヨーロッパ洲の部にロシア帝国をおくのは、トルコについては欧亞兩洲に分属せずトルコ帝国として欧州の中に収めているのと比して分編法の不整頓である。(2)地文学上の思想不完全。地文は山川海洋の配置より風雨寒暑の差、人類・禽獸・草木の分配まで悉く網羅して産業商業上多大の勢力を有するもので商業地理学の基礎であるが、本書は総論で殆んど地文学と商業との関係を説かず、各国編でも例えば支那について見ると、その全土を通觀して山川風土の關係にふれていないのは、「我ニ最モ密接ナル商業上ノ關係ヲ有スル支那帝国ノ地文ノ記述トシテ」誠ニ不備である（未完となっているが統篇はのっていない）。

本誌は著書の批判に限らず譯書の吟味にも力を入れている。沢柳政太郎は添田寿一訳のバイン『倫理学』を第16号にとりあげて「全冊ミナ誤謬ナルヲ發見シソノ大ニ世ヲ誤ルアルヲ恐レ…ソノ訂正ヲ請ハント」して書いているが、浜田も第23・24号に杉山重威訳のジェヴォン

ズ『経済学』の訳文を吟味している。

「原・訳両書ノ間非常ノ差違アルヲ…（また）全ク反対セル論旨ノ夥多アルヲ発見」した浜田は、原著の第一章第一節と第二節との原文と杉山のその訳文をかけた後、最後に浜田自身の訳文をかけた後、それらを比較しつつ注解している。

杉山は第一章第一節のはじめ数行のみを第一節とし、その残部を第二節の中に組み込み、名づけて「経済学ト他学ノ関係ヲ論ズ」としているが、このところは「恣ニ目ヲ立テ節ヲ改メ、原書ニナキ無要ノ辞句ヲ挿ミ、原書ニ言フ所ノ大関係アル句ヲ削リ、或ハ叙事ノ順序ヲ混乱スル等実ニ杜撰ヲ極メタリ、而シテ誤謬モ亦多シ」と評し、「原著者ガ意ヲ用ヒテ wealth ト riches トシ使ヒ分ケタルヲ訳者ガコレヲ共ニ富ト訳シタ」ことや「其ノ訳語殊ニ斯学ノ用語ニ関シテハ常ニ十分ナル注意ヲ施サザルベカラザル」に金剛石が「非常ノ声価（high value）ヲ有スル」と訳したことは決して軽々しく看過するを得ないとのべ、本書の欠陥を6点に要約して「須ラク速ニ本書ヲ絶版シ他日ヲ以テ更ニ全部ヲ改訳大成」すべしと結んでいる。

本誌第28号に半夢道人が荒井甲子三郎著『提要理财学』（郁文堂）をとりあげ、本書が実は荒井の新著ではなく、ジェヴォンズの『経済学初歩』の杉山重威訳に酷類するものであり、しかも本書が良書であるとの評が新聞雑誌によく出ているので、あえてこの書評の筆をとったとある。浜田の危惧、あるいは本誌第1号の巻頭言の危惧の通り誤訳の刊行がこういう副産物を横行させていたのだった。

本誌第32号の広告に出ている『法政学会講義』（毎月三回刊）に浜田健次郎は「経済学通論」を担当している。彼は交通論や商業地理のような応用経済学だけでなく経済学通論の専門家でもあったわけで、親友土子金四郎の『経済学大意』をとりあげて、正面から論争をいどむ書評をかいたのであった。

浜田が異義を申し立てるのは、第1に本書が本論の第2～6篇を生産・交易・分配・消費の順序で展開している事に関してであり、第2は著者の財及び価格の定義に関してである。第1について浜田は、著者が生産・分配・消費の順序を立てることに同意するが、分配の他に独立して交易を立て、この二つを財の交易上篇、分配篇、交易下篇

の三篇の順序に論述していることに反対、生産・分配・消費の三分法を主張している。第2については、浜田は著者の「人ノ欲望ヲ満足スルモノニシテ交易売買スルヲ得ル丈ノ価格アルモノヲ以テ財トスル」という定義を一応は受け入れるが、その中には不要の文字があるのでそれを除去すると「総て価格アルモノハ財ナリ」ということになる。それは全く自分の定義と一致するが、価格についての意味が土子と浜田とはちがう。そこで論争はこの点を中心に展開されることになる。土子も第1点については「差ノミ大事トモ思ハレザレバ」と聞き流し、「価格ノ論ヨリ延イテ財ノ性質如何ニ付キテハ経済学中極大ノ問題ナレバ斯学ノ為メニ」応答せざるを得ないとして受けて立つことになった。経済学上の重大問題についてのこの浜田・土子論争は従来あまり注意されなかったので、ややくわしく紹介することにしよう。

浜田によれば、土子が「価格ハ労力ト所望ト相合シテ起ル」とするのは誤りで、所望が価格の唯一の原因で労力の有無は関係ない。これに対し土子は二人の間に所望の意味がくいちがっている、浜田が所望とよぶのは経済的所望すなわち需要をさしているのだから、「果シテシカラバ君ガ説ヲ已レノ句調ノミニテ云フトキハ価格ハ需要ノミニ起因スルト云フベキナリ」とする。また自分が価格の起因中に労力を加えたときの労力とは所望する人自身の労力を指すという。また浜田が「財ニモ労力ハ関係ナシト云フトキニハ経済学研究ノ大目的ハ何レニアルカヲ知ルニ苦シムナリ」とのべ、くわしくは近く発行する財論にゆずるとのべて、一回目の答弁を終わっている。

これに対して浜田が再度筆をとって土子に質す文章を発表し、前回にとりあげた第二の問題すなわち価格の起因について浜田が所望を唯一の起因とするのに対し土子が労力・所望の合併したものとする点にしぼって再論するとして、つぎのように反論する。この土子のいう所望は広く desire の意、浜田のはより狭い want の意で、所望者が報酬を出して他人の持物を自己の専有物にしたいと望む want のことである。価格はこの「経済的所望即ち交換的所望ノ存否ニ由ルコトヲ、而シテ労力ノ有無ノ如キハ毫モ問フコトヲ要セザルナリ」と。そして浜田は所望と需要との関係をつぎのように図示する。実力的需要とは現在では有効需要とよぶもののことであろう。また浜田は交換的実力的

所望を経済的所望ともいつている。そして「価格ハ経済的所望ニ依リテ起リ實際の交換比率ハ需要ヲ待チテ定マルモノナリ」としている。

所望 { 非社会的所望
 社会的所望 { 非交換的
 交換的 { 心理的
 実力的即チ需要。

すすんで交換的所望及び労力と価格との関係をつぎのようにまとめている。

- (1) 交換的所望あり、労力なし→価格あり
- (2) 交換的所望あり、労力あり→価格あり
- (3) 労力あり、交換的所望なし→価格なし
- (4) 労力なし、交換的所望なし→価格なし

そして浜田はこれにつぎのようにコメントしている。

「ゼヴォンス氏嘗テ価格ノ起因労力ニアルカ將タ所望ニアルカヲ説クニ方リ問ヒテ曰ク、眞珠ノ貴価ナルハ深く海底ニ入りテ之ヲ採取スルノ労力アルガタメカ將タ又眞珠ニ対シ世間ニ於テ所望者多ク大ナル交換比率アルガタメニ人々險ヲ冒シ海底ニ潜ルノ勞ヲ執ルカト。著者幸ニ右ノ問ヲ玩味熟考セバ或ハ思半ニ過グルモノアラン」

浜田はさらに土方が自分を労力を軽視する者というが、自分は労力を軽視するのではなく、財たるの資格を有するには労力の必要はないと主張するのであって、土方が物の財たるを得るに必要な原素と財たる物を作り若くは之を得るに必要な原素とを混同することを正しているのだと主張する。そして土方の『財論』の主張をもふくめてつぎのようにのべている。労力は生産の要素として直接に財の供給を左右し間接にその価格を左右するに足るものだが、その力は価格の大きさを左右するに止まり、決して之が有無を定むるに足らざるものであると。

これに対し土方は再度反論の筆をとり、「労力ヲ要スベキト云フ語ガ分リニククバ難得ノ語トシテ見テモヨシ……約言スレバ先ズ珊瑚珠ヲ所望シ同時ニ之ヲ得ルコト難キヲ思フガ故ニ此ノ二原素合併シテ報酬物ヲ出シテ交易セントスルノ意即チ君ノ所謂経済的所望起ルニ至ル」と。そして最後につぎの図を以て反論を結んでいる。

所望
労力 > 交換的所望 → 交易 → 価格

両者の論争はこれで終る。さらに続けられれば、おそらく価値 (value) と価格 (price) との関係にまで議論は深まったろうと思われるが、そこに進むまでに打ちきられたのは残念である。とはいえ明治20—22年の頃にこうした「経済学上の大問題」について理論的に立場をことにする二人の間でこのように再三度の論争がかわされたことは記録するに値するであろう。

『出版月評』は決して経済学の文献のみを対象とするものではなかった。浜田が経済学者として登場するのは以上の場合であるが、彼の著書『日本古代通貨考』(哲学書院)が第8号に書評されており(無署名)、また彼自身兼堂主人の筆名で第5号に久松義典の政治小説『代議政談月雪花』(金港堂)の書評と第28号に「美術雑誌『国華』第3号を見て」とを書いている。これらは浜田もまた啓蒙期の知識人らしい教養の広さをそなえていたしるしであろう。ともあれ浜田は田口卯吉や福沢諭吉のように単なる経済学者たるとどまらぬ教養人・文化人として石川千代松、依田学海、陸羯南、三宅雄次郎(雪嶺)などに伍して、『出版月報』の常連の執筆者の一人として幅広い執筆活動をしたのである。